

木曽川文庫

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
春号は、中部地方の水源地域である金山町から、
その歴史と岩屋ダムの開発を中心に、
「川と街道」シリーズでは、河渡宿と中山道を集めます。



INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《益田郡金山町》

美濃と飛騨を結ぶ交通の要衝として成長した、金山町

AREA REPORT

岩屋ダム事業と金山町の多彩なプロジェクト

気ままにJOURNEY

麗しの水、雄々しい緑。
金山は神秘的な生きものたちの聖域

歴史ドキュメント

姫宮が通行した中山道と河渡の渡し

TALK&TALK

河渡宿の設定と長良川

民話の小箱

沓部の乙姫さま



美濃と飛騨を結ぶ 交通の要衝として成長した、金山町



金山町の市街地を上空から見る

金山町、地名の由来



金山町は飛騨と美濃を結ぶ交流路、武儀・加茂・郡上・益田の四郡に足を広げるといった形で地域社会を形成し、それぞれが独自に歴史を積み重ねてきました。

周囲には標高八百mを超える山々が連なり、その間を飛騨川・益田川・馬瀬川・三掛川・和良川・戸川・菅田川等の河川が走り、中部地方



の水源地域となっています。面積の九割は山林です。各河川に沿って集落と耕地が点在し、飛騨川と馬瀬川の合流点は小盆地として中心市街地を形成。町域は南北に二・五km、東西に一・五kmと細長く伸びています。

金山という地名は、約千二百年前から登場しています。江戸時代の絵図には、長洞金山、大谷戸の銅山などが記されており、現在も無数の廃鉱の跡を見ることが出来ます。金山という地名は、かつてた鉱山から由来しているのではないかと推測されています。

両面宿儺の伝承

金山町のあけぼのは約一万年以上前。旧石器時代や縄文時代の遺跡が数多く点在し、その大部分は飛騨川や馬瀬川流域の河岸段丘に位置、卵野原遺跡からは縄文中期の土器・石器と石囲いの炉跡をもつ住居址数戸と立石遺跡が発見されています。

時代は下り、仁徳天皇の頃(三十七年頃)、飛騨国に



鎮守山

飛騨川・馬瀬川等の河川が走る金山町は、美濃と飛騨を結ぶ要衝の地として、古代から水路や陸路が発展。中綱場は飛騨川の材木流下の中継点として、大いにぎわいました。近世には幕府領、尾張藩領など分割統治され、その支配構造の複雑さから国境争論も。幕末維新期には、新田開発や用水開削も実施されました。明治以降は交通網も整備され、現在は、観光開発をはじめ、多彩なプロジェクトが行なわれています。



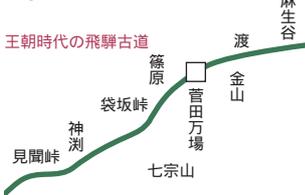
八幡神社の根子岩

は両面宿儺と呼ばれた豪族がいたと伝えられています。顔は一ツ手足各四本をもち、この怪人は金山の鎮守山に杖を休め、飛騨の国家安全や五穀豊穡を論じたという伝承も、この逆徒を討つするために大和朝廷が派遣したのが武振熊命で、飛騨へ入って初めて戦勝祈願をしたのが、金山町の下原八幡神社だといわれています。世はまさに大和朝廷が全国統一を進めていたころ、中央政府に拮抗した飛騨の土着勢力が両面宿儺だったのでしょう。中央政府から見れば、飛騨は怪人さえも住む山里だ、という認識がその伝承の背後にあたりえます。

古代の交通

武振熊命の飛騨討伐下向は、この地域を通過して北進。美濃の菅田から渡船で上陸する飛騨第一歩の地が大船渡といわれ、その後飛騨国府へ至る街道が、後の東山道飛騨支路です。

古代の飛騨路は美濃国を東西に貫く東山道の支路であり、美濃国菅田駅から飛騨国伴有



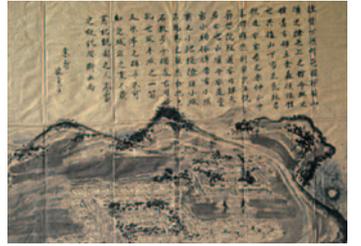
官道から街道へ



大船渡の渡し、藤倉側より望む

中世は官道から街道の転換期でした。室町時代には、菅田駅の名称は姿を消し、戦国時代に入るとすべての道路は、群雄割拠する領主の政治的軍事上の路線へと変わっていきます。

大船渡の渡し、藤倉側より望む



下原旅館(陣屋跡)

天正一四年(一五八六)飛騨国領主三木氏を滅ぼした金森長近は豊臣秀吉から飛騨の大名に封ぜられ入国するとともに濃飛国境に努めました。濃飛国境に位置する金山町一帯では金山、下呂間の中山七里の難所を開削し、飛騨川に沿った最短距離の道を打ち通して現在の益田街道の原形を築きました。この工事は住民の過酷な作業の結果であつたといわれ、難所の中心は保井戸。工事に功績があつた同村の農民小右衛門は、高三石四斗の永年褒章をもらつています。

その他、飛騨街道と郡上八幡街道、白川を経て東濃に通じる佐見街道は、近世の領国経営としても開かれた道です。街道の軍事的な要務が強まると、飛騨の表玄関として下原郷を重視した金森長近は、この地に旅館を兼務する金森陣屋を建てました。これは京都参勤の往復に宿泊する所で、館の周囲に堀を巡らした、陣構えの建築でした。また裏山には保木山城を築城しています。



保木山城跡

中綱場と御台所木

金森長近は陸路の整備とともに、下原村沿いを流れる飛騨川に中綱場を設け、兩岸の大名に藤綱を張って飛騨川を下る材木を止め税を課しました。その一方、藩財政を確立し、領民の暮らしが成り立つようとするため、御台所木と称する買木制度をとりました。これは農民や枕頭に銀・米・塩・味噌を前貸しし、材木を伐り出させた後、あらかじめ定めておいた値、藩が買いとつて差引勘定する制度でした。このようにして伐り出された材木は下原まで川下げし、材木商に払い下げるか、中綱場で税を徴収した後、名古屋や桑名へ流下しました。金森長近が改易され幕府領となつてから毛引



下原の中綱場跡

き続き中綱場番所が置かれました。現在も御番所跡が下原の福来に残されていますが、こゝに扱われた用材は膨大な数量であり、幕府にとって貴重な山林政策の場所でした。



福来の御番所

近世の分割統治と国境争論

近世に入ると江戸幕府は良材の宝庫である下原地区を天領と定め、その他は、尾張藩・苗木藩・郡上藩などが分割統治していました。金山地区白山町白山神社から東へ約二百mの山側に、従皇南尾張領と藩領境界を刻んだ石標が残されています。延宝年間(一六七二)旗本の遠藤新六郎の領地である東谷郡村と尾張藩領である金山村との境界争いが起つたため、尾張藩が強大な権力をもつての石標を建てたよつです。他にも境界争いは起きており、当地の支配関係の複雑さを如実に物語っています。

寛永一九年(一六四二)尾張藩は金山村に綱場をおき、飛騨川を下る材木に六分の一税を課しました。これは享禄年間(一五二八)三木氏が金山に役所を置き、馬瀬川筋、佐見川筋より流下する材木六本に一本づつを税として徴収したことを踏襲したもので、その他、岡役銀として陸路搬出の貨物にも若干、税を課しています。

下原御番所と口役銀

下原には益田街道と南飛街道の二箇所御番所がありました。益田街道の御番所は飛騨の表玄関にあたり最大の構えで、口役銀(通行料)も飛騨の一八箇所の内、四分の一を占めていたことから、大口番所といわれました。金森時代には下原町村の茶屋の段にありましたが、砥石峠から坂道する者が出てきたので、元禄の頃には中切村に移築。明治五年(一八七二)には廃止されました。今でもの付近には、柵越、ませ戸の地名が残っています。

御番所の目的は治安維持でしたが、次第に口役銀の徴収が多くなりました。関所では川から山までを柵で結び、物資や人の往来を厳しく監視してました。大原騒動では大砲を引いた郡上藩兵が通り、梅村騒動は関所破りされるなど、幕末動乱期の様々な逸話が残っています。

新田開発と直井家の功績

弘化二年(一八四五)、中綱場の御用材改役人・直井勘右衛門政純が中心となり、麻生谷で七町歩余りの新田を開発しました。麻生谷に人家を置けば、下原御番所を避けて郡上方面の坂道の取締りもできることになり、その功により幕府から、年一八俵の御手当米が下賜されました。

慶応三年(一八六七)には飛騨谷に五町歩の新田を完成、開拓当時は山犬もいて、困難な作業でした。新田には周辺から住民、八戸が入植、明治四二年(一九一〇)、飛騨谷の人たちは、直井の功績に感謝して常磐神社境内に開拓碑を建てました。お寺の下の池堤は、直井家が造成したものです。



御用材改役人直井家と堤跡

明治の新政と梅村騒動

明治時代になると、梅村騒動など時代の風が吹きぬけるなか、金山村は市町村制の施行により、明治二年(一八八九)武儀郡金山村となりました。

飛騨一円を揺るがした梅村騒動とは、高山県初代知事に就任した梅村速水の政策に対する暴動です。当初、新政治の改革を次々と打ち出した梅村も、安石代といつ年貢の米穀払い下げ制度を廃止しようとする、住民の反感を招くよつになりました。一種の増税を実施したために、暴動に発展したのです。

とほやえ、速水用水といつ大事業を実施したのも梅村速水。釜が平用水とも呼ばれるこの用水開削は、麻生谷の下流から現在の発電所近くの地蔵野まで、水を引くといつ大変な難工

事の連続でした。中山七里の断崖絶壁の途中に深さ六尺、巾三尺、距離三百mの大規模な水路を開き、槓の太木をくりぬいて水を通すなどして、用水路を完成させたのでした。完成により三町五反の田も開発。その後、約七〇年稲作は続きましたが、昭和一〇年(一九三五)下原発電所の着工と同時に、槓の水路も使われなくなりました。

理想に燃えた梅村は、こつした実績を残しましたが、その政策はあまりに急激なもので、時代に受け入れられなかったのかもしれない。梅村騒動の火の粉はこの地にも及び、部下の中島七兵衛門の家は焼き打ちに、下原の名主加藤家も打ち壊しにあいました。これは安政七年(一八六〇)、日米修好通商条約の使節団として渡米した、加藤素毛の生家でした。

着々と進む現代のプロジェクト

金山町一帯は以前から交通の要衝として茶や木材を扱う商人が多く、金山や菅田は商工業の中心として栄えていました。そして、高山線や国道四一線の開通以来、名古屋方面との関係が密接になりました。

昭和三〇年には、金山町、菅田町、下原村、東村と分立していた町村が、益田郡金山町として合併統合。昭和五一年には、治水や利水発電を目的とした岩屋ダムが完成しています。

平成四年には福祉センター、ゆとり館、デイサービスセンター、やすらぎ館が完成。平成五年には、ハイサイドスポーツセンターがオープンするなど、多彩なプロジェクトを着々と実施。馬瀬川上流の東仙峡・金山湖や益田川沿いの景勝地、中山七里など、観光にも力を注いでいます。

参考文献

- 『金山町誌』 昭和五〇年 金山町
- 『木曾三川治水百年の歩み』 平成七年 建設省
- 『金山町の文化財』 平成一〇年 金山町教育委員会
- 『下原の史跡と伝承の地』 平成五年 下原公民館文化部古郷の会
- 『金山町飛騨美濃トック』 平成八年 金山町
- 『角川地名大辞典24岐阜県』 角川書店

岩屋ダム事業と金山町の 多彩なプロジェクト

岩屋ダムは中部地方の水瓶です。利水や治水、発電を目的として建設されたロックフィル式の多目的ダムです。その一方金山町では地域活性化を目指して多彩なプロジェクトを開始。CATV事業は平成一六年開始を目標に着々と進んでいます。



岩屋ダム湖



馬瀬川第一発電所

岩屋ダム、建設までの道のり

湧水を集めて美しい流れをみせる金山の水。飛騨川・馬瀬川など、その豊かな水は中部地方の水瓶です。水害や濁水などがしばしば発生し大きな爪あとを残したものの、その水源を活用し、地域社会に貢献しています。昭和五十一年に完成した岩屋ダムは、日本有数の美しさを誇るロックフィル式ダムです。飛

騨川支川馬瀬川の金山町卯野原地点に、洪水調節・灌漑用水・上水道用水と工業用水の供給・発電を目的として建設されました。飛騨川の電力開発に関しては、大正末期から行なわれており、中部電力では、電力需給及び河川水の有効利用を図るため、最上流部の高根発電計画と中流部支川の馬瀬川発電計画を根幹とする飛騨川一貫開発計画をとりまとめています。

通産省では、昭和三八年、岩屋地点を木曾川総合利水と水力発電の総合開発地点として取り上げ、農林省においても昭和三九年度に木曾川総合利水事業の調査地点として採択し、利水と発電の総合開発計画として計画が続けられ、同年五月に有効貯水量一億m³が策定されました。

建設省は木曾川の治水計画について、昭和四一年六月、既設の丸山ダムのほかに上流部に岩屋ダム等を建設し洪水調節を行なう必要があるとの結論に達したため、洪水調節容量五千万m³の岩屋ダム計画を策定し、各省に対して正式に治水事業の参加を申し入れました。

関係各省庁では調整の上、昭和四二年六月の水資源開発審議会

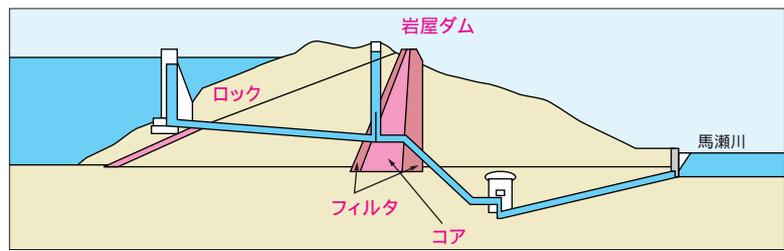
岩屋ダムの水の使われ方

堤頂427.5m	洪水時満水位424m
治水容量5,000万m ³ 常時満水位411m	13m 大雨の水を一旦この部分に貯め ゆっくり流して洪水を防ぎます
発電・利水容量1億m ³ (うち利水6,190万m ³) 低水位366m	45m 発電と下流域の上水道用水・ 農業用水・工業用水などに使用
ダムの高さ127.5m	60m 将来砂がたまることを予想し、 死水として利用できない部分
	堆砂及び死水容量 2,350万m ³ 河底306m
	基礎岸壁 EL 300.000

岩屋ダムの左岸、県道沿いには、大洪水の際、ダムを守る「洪水吐き」が設置され、そのゲート水を止めたり出したりする鋼鉄の扉はわが国で、「一」を争う規模の大きさを誇っています。

砂利の層、そしてその「コアとフィルター」を安定して立たせ水圧に耐えるため「ロック」と呼ばれる岩塊の層が積み上げられています。それらはすべてこの付近で採取された粘土・砂利・石を使用してあり、構造的にも高い効果を発揮、耐久性にも優れ、豊富な水をしっかりと蓄えています。

ダム本体にはコンクリートは一切使用せず、中心部に「コア」と呼ばれる水を止める粘土の層、そのコアを流さないようにはさんで保護する「フィルター」という



ロックフィル式の構造

て、岩屋ダム計画が確立。同四三年六月の電源開発調整審議会においても、治水参加の岩屋ダム計画について議決がなされました。昭和四三年には、建設が閣議決定されました。

ダムの構造

ロックフィル式という形式を採用した岩屋ダムは、高さ一二七・五m、名古屋城の二・六倍、ダムの上の長さ三三六・六m、一六両編成の新幹線とほぼ同じ長さ。総貯水量一億七千三百万m³という日本でも有数の規模を誇っています。

ダムの役割と機能

岩屋ダムの完成により、治水はもちろん、水や電力施設として、大きな役割を果たしています。

まず第一は、洪水調節です。大雨が続く大水が心配される時、その水を岩屋ダムに最大五千万mをいったん貯水し、逐次流して下流を洪水から守ります。

第二は、利水機能です。名古屋市や愛知県の尾張地方の各市町村、岐阜県の可児市や美濃加茂市などの市や町の貴重な「上水道」の水源となっています。そのほか田や畑を潤す、農

業用灌漑用水。工場で使用する「工業用水」等にも利用されています。

第三には、もちろん水力発電です。岩屋ダムの建設に併せて中部電力では、馬瀬川第一発電所及び第二発電所を建設し、馬瀬川の流量のほか、飛騨川本流等から導入。総水量一億mを利用し、それぞれ最大出力約二九万kW約七万kWの発電を行っています。

補償の概要

工事は昭和四八年春着工、昭和五一年秋には竣工しています。しかし着工までには湖底に沈んだ家屋をはじめ、隣接する馬瀬村も宮

金山町の多彩なプロジェクト



岩屋ダム

岩屋ダムの誕生は、治水・利水などの貢献だけではなく、新しい観光スポットも登場させました。満々と水をたたえる岩屋ダムは、風光明媚な東仙峡金山湖として静かなたたずまいをみせ、ルアーフィッシングを楽しむ人も訪れる南飛騨の観光ポイントとなっています。

こうした観光事業はもちろん、金山町では地域活性化をめざし多彩なプロジェクトを実施しています。

金山町地域情報基盤整備事業

現在、金山町には約三二のテレビ共同視聴

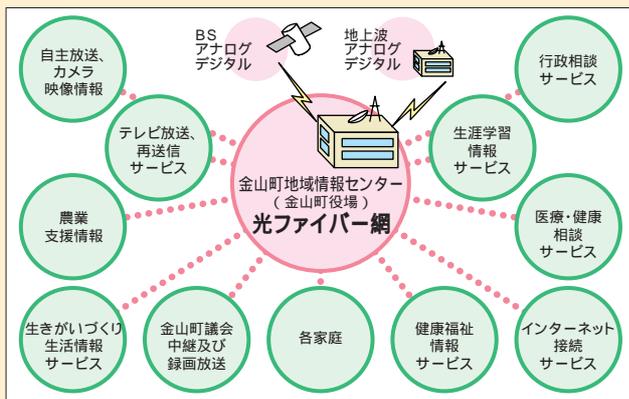


CATV自主放送設備



組合があり、それぞれが受信基地を持って運営しています。これらの施設を一本化する。ことにより、全町型のテレビ視聴ネットワークを構築し、現在のテレビ放送を送信するのはもとより、町の自主放送やインターネット接続、行政情報の送受信、健康福祉への支援、農業支援システム生きがいつくりシステムを取り入れたCATV事業を計画しています。事業は平成二三年度から着手し、役場の中に情報センターを設置して、役場からケーブルと同軸ケーブルで各家庭の保安路までのネットワークを構築します。各家庭へは平成一六年度からの共用をめざしています。

事業の概要は図の通りです。



美濃東部区域 農用地総合整備事業

この事業は、区画整理、暗渠排水など面整備と広域的な農業用道路の整備を一体的に行なうことで、農業の生産性の向上と農村環境の

め、岩屋ダムと下流の馬瀬川第二ダムを併せて三五戸の方が移転、これに加え水没公衆施設としては、小中学校三校、教員住宅七棟、消防防所器具置場四棟、診療所一箇所、集会所三箇所などがあり、さらに日本電信電話公社の電話線移設約四〇km、県道付替一八km、町村道付替一五・四kmに及びました。

こうした一般及び公共補償に加え、各関係町村から水没者見舞金と林道建設・県道改良・山林経営の振興・公共事業などの地域開発費用の負担が要望され、これに心を水資源開発公団と下流受益者は、公共補償の協定を締結しています。

またダム建設によって漁場に影響を受ける馬瀬川上流漁業協同組合、昭和四九年一月解決、馬瀬川下流漁業協同組合、昭和四八年一月解決に対する補償と、工事中の濁水により影響を受ける益田川・馬瀬川下流・飛騨川などの各漁業組合に対する補償も行なわれました。

参考文献

- 『金山町誌』 昭和五〇年 金山町
- 『広報 かなやま』 一〇〇一 六月号
- 『角川地名大辞典24岐阜県』 角川書店
- 『木曾三川』 その流域と河川技術』 昭和六三年 建設省

改善を図り地域の活性化をめざす事業で、農用地整備公団が事業主体となり実施します。

この事業により土地の生産性の向上に努める一方、農業の担い手不足などにより、耕作放棄地など未利用地も発生しているため、農業の担い手育成や農地の流動化などの対策を講じて耕作放棄地の解消を図り、農地の有効利用に努めています。

さらに、金山町地域情報基盤整備事業では農地情報システムや農地支援システムを構築し、農業経営をサポートします。

農地情報システム

このシステムを利用して、転作・耕作情報や作付作物分布図などを提供したり、また農地の遊休地情報を把握し農地耕作希望者や耕作委託をサイト上で申請手続きを行なえるようになり、有効的な農地利用の実現を目指します。

農業支援システム

このシステムでは気象情報・病害虫情報・各種管理情報を提供。気象及び病害虫の被害を未然に防ぐために、過去の調査結果を考慮し自然現象や病害虫の発生予測をたてながら、農業生産者への的確な情報を提供し農業支援を行います。

麗しの水、雄々しい緑。 金山は神秘的な生きものたちの聖域



境橋付近で水遊びをする子どもたち

岩を飲み水流が激しく舞う渓谷。白い飛沫をきらめかせ落ちる滝。桜並木は雪をふくらませ、青々しい連山は、湖面に美しい姿を映し出す。美濃と飛騨、二つの顔をもつ金山は自然のサンクチュアリ。

春の女神、ギフチョウが、新しい季節の到来を告げていた。

春の女神、ギフチョウ

ゆるやかな山並みが広がる金山の森。ここは神秘的な生きものたちの聖域です。春先のほんの短い間にしか見られない幻の蝶・ギフチョウが世界で初めて発見されたのは、祖師野の森でした。

明治一六年（一八八三）、岐阜市の名和昆虫研究館の初代館長、名和靖氏が一匹の見慣れない蝶を見つけたことから始まります。その名は岐阜県で発見されたから、帝国大学・現東京大学で調査した結果、日本列島の本州だけに生息することが判明しました。

トリ、トリと花々を舞う美しさを、春の女神「春の舞姫」とも呼ばれるギフチョウ。その姿をみられるのはカタクリの花が咲く頃。春の暖かな日に、花の蜜を吸うために、サクヤやミシ、カタクリなどに訪れるようです。

けれどその姿を見つけた人は、くわすか羽の紋様が、枯葉などの中では保護色になって、見分けにくくしていました。

金山町のキョウチネツはギフチョウの里。この町の森の精たちが、ギフチョウを絶滅から守ってくれたのもいけません。

他の蝶に先駆けて早春の野山に舞うギフチョウ。その姿を見つけたなら、きょうと幸運が舞い降りてくるにちがいありません。

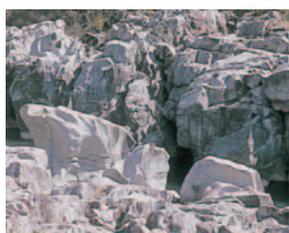
麗しい水の国

金山境橋から下流に至る二八km、飛騨川沿いの渓谷が中山七里。飛騨の名君、金森長近が飛騨川沿いに街道をつくたのが始まりです。飛騨川の急流によって見事な形に侵食された岩々は、まさに自然が作り上げたオブジェといえる美しさです。

中でも丘巻は中山七里の錨穴群です。下原発電所から上流約四百mの河川敷に大小無数の錨穴が点在。直径一mから三〇cmほどの岩の円形に水がたまり、鍋釜に似ていることから「釜」とも呼ばれていました。

屏風岩、羅漢岩、牙岩など、神秘的な名前がつけられた錨穴には、やはり幾多のドラマが秘められています。

天に向かつてそそり立つ「牙岩」は、雨ざいの行事を行なったところ、岩の上にはくぼ



牙岩



中山七里

みがあって、一年中水がたまっていたようです。どんな日照り続きでも水がたまっていることが、この水をくみ出せばまた雨が降るだろうと考えた人たちが、雨ざいの神事を始めたようです。そんな村人たちが帰りかけずぶぬれになつたのが「御番所の松」。下原口御番所があったことから「こう呼ばれ、五本の老松が飛騨川絶壁の岩上にそびえ立つ、中山七里の代表的な名所でした。



御番所の松跡

中山七里の中でも難所の一つであった「鳴る岩」は、麻生谷から国道を百m北上した左側あたり。今では面影はありませんが、当時は岩壁が川にまで張り出し、眼下を流れる激流の音が、この岩壁に響き、あたかも岩が鳴っているようでした。このことから「鳴る岩」と呼ばれ、旅人は激流の音を聞きながら、「こわ〜と通ったぞです。



二見滝

中山七里と並ぶ国定公園に指定されているのが、馬瀬川支流の横



白滝

「鳴る岩」と呼ばれ、旅人は激流の音を聞きながら、「こわ〜と通ったぞです。



鶏鳴滝

中山七里と並ぶ国定公園に指定されているのが、馬瀬川支流の横



紅葉滝

水の国美濃、山の国飛騨

名古屋駅からJRワイドビューひだに乗って約一時間、振子電車の鼓動にあわはれるように、こつくりこつくりとほしのつたた境。これも列車の旅ならではの小さな愉しみです。そんなまどろみから目覚めると、場内アナウンスが中山七里の美しさを案内してくれました。

早春の陽射しを浴びて輝く飛騨川。碧の水面に切り立つ奇岩・怪石の群れ。自然という絵筆が描く名画の前には、どんな芸術家も頭を下げてくださいませんか。

「水の国美濃、山の国飛騨」。二つの顔をもつ飛騨金山へはまもなく、つそつとこんもり、ただけしく広がる金山の森。湧水を集めて清らかな流れをみせる金山の水。人と自然が調和する金山の旅の始まりです。

金・山・町・の・歳・時・記

金山祭り

4月15日に近い日曜日 / 市街地

桜を模した花みこしが練り歩き、われんばかりのお囃子が山々にこだまする金山最大のお祭りです。えがら八幡神社の例祭が原形といわれ、えがら獅子、乙女の舞などともに「花みこし」が奉納されています。



下原祭り

4月第1日曜日 / 下原八幡神社



また肌寒い4月初旬、下原八幡神社の境内には、十数人の少年たちの華麗な花笠おどりに湧きたちます。その行列は、警護の鎧武者を先頭に、三人の猿田彦、アメノウズメノミコトが続きます。1600年も続く祭りはまさに時代絵巻。やがて豊作祈願・養蚕繁栄を願う善男善女による花笠舞いの神事が始まると、一転、エネルギーあふれる舞臺に。あでやかな晴姿と歓声が金山にひと足早い春を告げます。

金山町 EVENT INFORMATION

- ぬく森健康フェア ウエルネス～ぬく森の里～6月
- 馬瀬川下流ジャンボ鮎つり大会 馬瀬川下流7月
- 飛騨金山花火大会 市街地8月
- 横谷峡滝まつり 横谷峡 四つの滝8月
- 第28回ひだ金山清流マラソン大会10月
- 第43回 中部・第32回北陸事業団対抗駅伝競争大会11月



交通のご案内

- 名古屋方面からお車をご利用の方
- 名古屋 中央高速道路 (約60分) 中津川 国道257号 (約60分) 下呂 国道41号 (約30分) 飛騨金山
- 名古屋方面から公共交通機関をご利用の方
- 名古屋駅 高山本線 (約60分) 金山町役場
- お問い合わせ
- 金山町役場
岐阜県益田郡金山町大船渡600-8 TEL 0576-32-2203(代)
http://www.town.kanayama.gifu.jp

気ままにJOURNEY

謎の巨石文化

岩屋石隆遺跡は岩屋タムの下流約二百mの南斜面に巨大な一枚岩がレシンのように差し出し、奥が洞窟のようになっている岐阜県指定の史跡です。惠源大義平がヒレを退治したという伝



金山の巨石群

説が残り、岩屋神社も祀られています。ここは明治以前、妙見神社といわれ、北極星を神格化した妙見信仰があったところ。祭神は「天ノ常立神」という天の神。古代から信仰の場になっていたそうです。この遺跡の周辺に金山巨石群があります。古代の遺跡の可能性があるので、調査が進められています。

谷峡です。散策の山道を少しのぼると、白滝・一見滝・紅葉滝・鶏鳴滝の四つの雄大な滝が姿を現します。中でも鶏鳴滝が最大級。滝壺は「鶏淵」とも言われ、元日には白い鶏が鳴くといわれています。

江戸時代の資料に「このあたりは幽暗の地にして四の垂に天狗すむ」と紹介されています。

川面を渡る風、水辺の葉裏でひっそりと羽を休める昆虫、清流で静かな時を過ごすオオサンショウウオ…。生まれたての自然が息づく水の国に、人は神を見たのでしょうか。時には牙をむく自然の営みも、新しい季節を迎え、柔らかな光に包まれていました。

世界各地には数多くの巨石遺跡が残されており、その代表的なのがイギリスのソールズベリー地方のストーンヘンジ。宗教儀式に使われたという説が有力ですが、カレンダー的な役割があったとして、日の出、日没にあわせて石が配置されており、直線上に並んだ石の北東方向に夏至の太陽が昇ってきます。このような巨石群は、古代の天文観測台として、古代人が三六五日を知る手がかりとなっていたと考えられています。金山の巨石群も、太陽や星の動きの目安とな

るような岩の配列が見つかり、これらの巨石群が古代人の天文台。夏至・冬至や春分・秋分を知る目安として利用されているのではないかと、いつ考えが生まれましました。

斎藤国治元東京大学東京天文台教授は、確実となりゆく古代天文観測台の正体の発見はすばらしい業績と、これまでの調査を評価。巨石のかたわらに立ち、太陽の光を追いかけてみれば、謎に満ちた古代人の生活が見えてくるかもしれません。

飛騨人渡米、第一号

永い太平の世から眠りをさました幕末維新。新しい時代を夢見て世界一周を果たした人物がいます。日本とアメリカとの貿易や文化の交流を目的として海を渡ったその人は、金山生まれの加藤素毛。飛騨人渡米第一号でした。万延元年（一八六〇）、日米修好



金山町郷土館

通省条約批准書交換のため派遣された随員の一人が素毛。途中、暴風雨に遭遇し苦難の航海の末、サンフランシスコに上陸。はじめて見る異国情緒に一行ははなはだ仰天したといえます。また、初めて乗った蒸気機関車の珍しさ、その感想を素毛は歌に記したためています。

裂る程 車の音も 暑さかな

一方、チヨウメグに陣笠に大小刀をはきまわらし履きでたちで、道路はレシ力敷き、石造洋館建ち並ぶ大通りを堂々と進んだ大名行列は、実に奇観であったと、当時のアメリカの新聞は絵入りで報じたと伝えられています。

見るもの聞くものけた違いの珍しさ。特に水道水洗便所の仕掛けが不思議で、ときどき大失敗をしたと素毛は日記に記しています。

七月の周遊後、素毛の雄弁な帰朝談は江戸各所で大好評。郷里に戻った後も、飛騨各地で帰朝談を行ない、絶賛を博したそうです。

帰国後、素毛は政治の世界に関与せず、外国で得た知識の啓蒙に勤めました。彼の残した航海日記などの資料は、金山町の加藤素毛記念館に保存され、一般公開しています。



世界一周を果たした加藤素毛

特集 川と街道

第三編

姫宮が通行した 中山道と河渡の渡し

姫街道という異名をもつ中山道のルーツは律令時代官道として整備された東山道は江戸時代に入ると中山道に五街道の一つとして重要な役割を果たしていました。中山道五五次の河渡宿もまた、中世にはひらけていた宿場町。川の合流する川下にあることから水害が多く、江戸後期には嵩上げ工事が行われています。



つまり、太平洋に面した東海道ははかに気候温暖とはいえ、その途中には大井川、天龍川、富士川などのような大河川が多く、いたん雨が降ればなかなか渡河できないなどの悪条件が多かったためです。

しかし時代の進展に伴い、それらの河川に渡し船などが整備され始めると、次第に東海道を利用する者も増加。こうした東海道の発展とともに、東山道はしばらく裏道的な存在となっていく。

戦国時代、群雄割拠の時代には小田原北条氏が倉賀野・高崎・板倉・安中・松井田・坂本の六宿を創設、また下諏訪・塩尻・洗馬・賢川・奈良井・敷原・福島の七宿は武田氏が伝馬の継立を行っていた。東山道から中山道への移行期にはすでに宿駅が設けられ始めていました。

東山道とともに江戸時代の五街道の一つとなつた中山道は、この時初めて制定された街道とつわけではなく、その前身を東山道とも呼び、古代から中世にかけて西国と東国を結ぶ重要な街道でありました。

そのルーツは大化の改新(六四五)のころ、改新により駅制や道の整備が進む中、西国と東国を結ぶ道路は東山道と呼ばれるようになり、たとえらわれています。



東山道から中山道へ

延喜式によれば、東山道が走る美濃の駅に対し、時の権力者は数々の恩恵を施しています。当時の東海道は悪条件が多かったため東山道を利用する者が多く、そのため東山道を保護していたようです。

ついでに発展した中山道は、東海道とともに江戸と京を結ぶ重要幹線として利用されました。幕府の旗本などで大阪勤番の者は、往路は東海道、帰路は中山道を利用する例が多く、出水による川止めや浜名の渡し、桑名の渡し

などが多い東海道をさけた女性の道中に、中山道が好まれたことから、姫街道とも呼ばれていました。幕末の和宮の降嫁がこの中山道を利用したのはその良い例といえます。

曾川で敗退し、河渡の渡しを戦いで自害しています。また、関が原合戦の前哨戦が行われたこの渡しでした。合戦に先立つこと二〇日前、東軍の徳川家康軍は、木曾川を渡るための戦い、笠松・米野の戦いを勝利した後、岐阜城を落城、西軍方の城主の織田秀信を出家させ、一気に大垣城へ向かおうとしていました。勢いに乗った東軍は、木曾川の次に長良川を攻略しようと軍を進めました。

中山道六九次のうち、五五番目の宿場町が、河渡宿です。合渡宿とも書かれていました。

大きな遊郭のある加納宿まで一里半、西は谷汲山への分岐で有名な美江寺宿まで二里七丁。宿場間の距離が短いことから、両宿のように特徴のない河渡宿は川止めの時以外は素通り客が多かったようです。

河渡宿は、長良川とその支流伊自良川の合流点にあるので、その地名が起きたのでしょう。この宿場町から二五〇mほど北上したところに、河渡の渡しがありました。河渡の渡しは承久の乱(一一三二)の合戦の舞台になったところです。これは朝廷と鎌倉幕府の政権争いですが、朝廷側についた鏡右衛門が大井の渡し、木



現在の長良川と河渡橋(昔の河渡の渡し付近)

一方、頼りにしていた岐阜城を落とされた西軍は、ここで東軍を一気につぶし、戦況を有利に導こうと決死の配備で戦いに臨みましたが、勢いに乗る東軍を一手に引き受けてしまつてはつしようもありません。混戦とはなつたものの結局は支えきれず、二百余人を討たれ、大垣に敗走しました。

長良川と東山道をつなぐ交通の要衝では天下を競つて、さまざまな合戦が行われていたようです。この渡し近くにあった河渡城は、美濃三人衆の一人であった安藤伊賀守就の居城。天正八年織田信長の勦気を受けるまで在城していました。

河渡宿の嵩上げ工事

昔から、川の合流点にあった河渡宿は、輪中の最も低い場所にあたり、年々水難に悩まされてきました。中でも文化年間(一八〇四〜一八)には未曾有の洪水に見舞われ、このままでは宿も途絶えるのではないかというほど被害でした。そこで文化二〇年(一八二三)の美

濃代官松下内匠は、地上げ工事を計画。河渡宿水難手当貸付金が設けられました。これにより、砂・砂利・土の三段の土盛りと、家屋の改築によって一応の宿の形態は整えられました。



河渡宿宿碑

この功績に人々は大変感謝し、後に松下神社を建立。しかし、神社も碑も第二次世界大戦の戦災に遭い、現在では碑も一部しか残されていません。

こうして整備された宿場町ですが、元来が小さな宿で、町並みは中山道の両側に続く二町ほどのみ。脇本陣がないときもありました。しかし河渡の渡しを控えていたため、米・塩・木材などを運送し、また川止めのたびに客を泊めていたようです。宿の戸数も文化二二年には八軒、天保一四年(一八四三)には一四軒に増加。大名行列や旅人が往来して宿泊し、大いに繁盛しました。

現在、宿場町の東側は河川改修が行われ、昔日の面影は残してはいませんが、かつての旧堤防のすぐ近く、宿場の入り口には地元



松下内匠代官の功績碑(松下神社)

の人々に馬頭観音さんと呼び親しまれる愛染堂があります。これは天保一三年、道中家内安全、五穀豊穡を祈願し愛染明王に祀



現在の河渡宿(岐阜県河渡)の街並

るために建立したもので、費用は荷駄役人足が銭百文ずつをだしあてまかなっています。以来、旅人や長良川を上り下りする舟の安全を見守っていました。明治時代の震災や洪水などにより四回も



一箇所にある「河渡宿」と「一里塚」松下神社



愛染堂(岐阜県河渡)

移転しています。この他にも、河渡の町並みの北側に、一里塚が残されています。

近世の河渡の渡し

かつて河渡宿へ行くには、今の河渡橋あたり「の河渡の渡し」と、その上流の「小紅の渡し」の二つの渡しがありました。一般的に利用者が多いのは河渡の渡しで中山道の表街道と呼ばれており、鏡島を結んでいました。一方、皇女和宮の下向などには、小紅の渡しを利用されており、裏街道といわれていました。

これらほとんどに長良川を越える渡船場です。通常、長良川の川幅は五〇間(約九〇m)、出水時にはおよそ一五〇間(約二七〇m)で、出水が七合目になると、渡船は差し止められま

した。

河渡の渡しには、長さ九間、梁六尺の渡船二艘を配備。船頭一人、水主一人、四人がおり、平日は一〇人が勤め、一艘に三人ずつ交代で乗っていました。出水時には舟人を増加しています。このほかに、長さ六八間、梁四六尺の百姓の持ち舟が用意されていました。寛政一三年(一八〇一)当時の渡し賃は、武士は無料で、商人荷一駄につき人馬とも一八文、旅人一人六文でした。

姫街道とお紅の渡し

中山道が大通りに利用されたのは、將軍の上洛・日光例弊使・姫宮の輿入れ・茶室道中・大名行列・朝鮮通信使・琉球使節の通行などのときでした。

姫宮の通行は、享保一六年(一七三二)・比呂が將軍家へ輿入れしたのが最初です。以後幾度かあり、最も大掛かりな和宮の行列が最後となります。



小紅の渡し

こうして姫宮の通行は、宿の大きな負担でした。道や橋の修理をはじめ、前日には道路を清掃したり、休泊所には火消しの者が詰めました。海川の魚類・生魚・塩漬魚・干魚・烏・豆腐・こんにやく・小麦・そば・粉・御菜の有無・飲料水の浄・不浄などの下調べがあり、夜番・自身番の強化をしなければなりません。

天下の將軍への嫁入りの旅は、大名の参勤交代の旅とは比べものにならない大行列でした。なかでも最大の行列は、今も各地で語り継がれている皇女和宮の輿入れで、従者や警護の武士、人足合わせて二万人以上、馬も千頭をこえたほどでした。姫宮の大通りで宿泊所になつた宿場町では、本陣はもとより一般の民家も家屋敷の増改築までして迎え、見送つたのです。この和宮下向のとき、河渡宿では、昼食を本

陣でとりました。和宮の飲料水は、どの宿でも幕府役人が事前に調査をして水質の良否を決めて水の重量を決めたようですが、ほぼ本陣の井戸が指定されたようです。ところが、河渡宿の井戸は本陣ではなく別な井戸が指定されました。そして井戸の周囲に竹矢来を組み、め縄を張って一般の使用をいさひ禁じたのでした。井戸水は毎日使わないと水質が落ちるので、こつこつとその点の配慮はなかつたようで、このことから姫宮通行の混乱がうかがえるようです。

和宮下向に際して利用された小紅の渡しは、鏡島と一日市場を結ぶ渡船です。今から三百年以上昔に整備されました。

「小紅」とは、一日市場の農家などから岐阜町の商家へ嫁ぐ花嫁が、川面に顔を映して紅、白粉をおとし、在所の未練を断ち切って小さく紅だけを付けて渡つたことからその名がついたとされています。その他にも、小紅という女船頭がいたことが、紅を採る草が生えていたなど諸説があります。

かつて岐阜市内には二つの渡し(芥見・古津・日野・長良・馬場・上門・四ツ屋・忠節・龜・小紅・江口・河渡)が存在していましたが、それは戦後、日本の復興とともに次々と姿を消して行き、現在、運航している渡船は、岐阜県内でも小紅のみとなっています。県道文殊茶屋新田線として、地元の日市場自治会が岐阜市の委託を受けて運営。この渡しは県道にあたることから渡し賃は無料です。創設時と同じく手漕ぎで運航されており、かつての中山道の情緒を味わうことができます。

参考文献

- 『新装版 今昔中山道独案内』今井金吾著、平成九年、日本交通公社
- 『岐阜県の中山道(新版)』松尾一著、平成三年、まじお出版
- 『岐阜市中の通史編 近世』平成〇年岐阜市
- 『岐阜県史』通史編 近世下巻、平成〇年岐阜県
- 『生きていた美濃中山道』古田三郎著、昭和五年

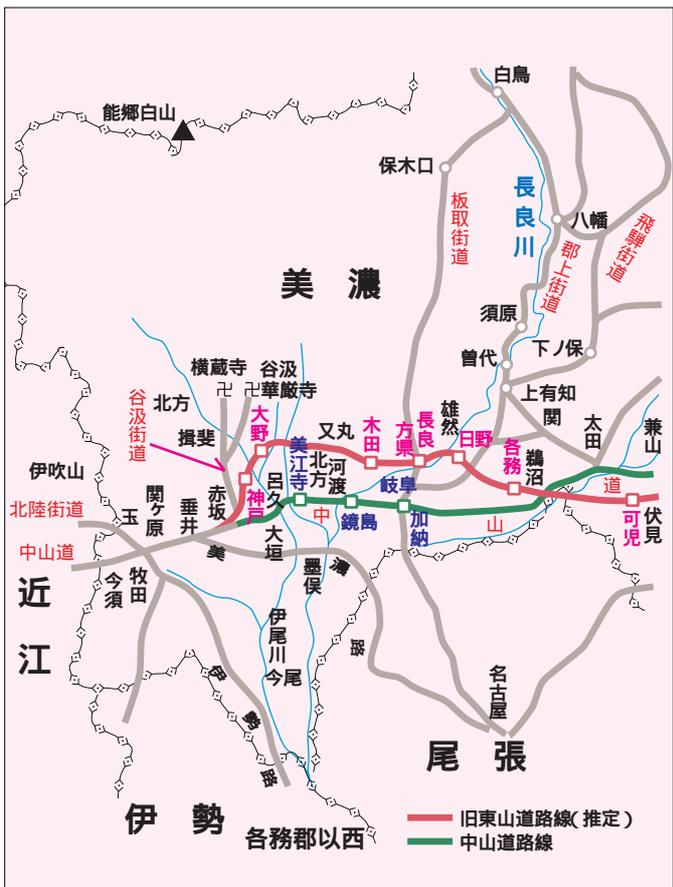
河渡宿の設定と長良川

岐阜女子大学教授・同大地域文化研究所長 丸山 幸太郎氏



丸山幸太郎氏

昭和12年8月岐阜県恵那市に生まれる。岐阜大学史学科卒、県歴史資料館長、岐阜市明德小学校長を経て退職。現在岐阜女子大学文学部観光文化学科教授、同大地域文化研究所長。
 主な著書：『幕藩制解体過程の農村』、「古田織部」、「日本農書全集第一期八巻」及び「同二期八巻」、「岐阜県史」、「岐阜市史」、「揖斐川町史」、「池田町史」、「南濃町史」、「平田町史」、「輪之内町史」、「恵那市史」、「宮村史」、「神岡町史」、「上矢作町史」等他、多数。
 平成14年に『ぎふ観光と食文化』岐阜県先人顕彰研究会を発行して注目を集める。



一 中山道の加納經由と家康の意図

関ヶ原合戦後、政権を掌握した徳川家康は慶長八年（一六〇三）征夷大將軍の任命を受けて幕府を開府したが、それに先立って、東海道の路線を決定し、次いで中山道など諸街道

の設定に乗り出した。中山道については、古代の東山道の国々を通り、近江草津で、東海道と連絡する街道とされた。全六七宿駅のうち美濃国では、東は落合から西は近江境の今須まで一六宿が設定された。ただし、最初から全路線や宿駅が整まっていたのではなく、諸大名の参勤交代制が整

う元和・寛永期によりやく定まり整備されたよつである。

この中山道の路線と宿駅の設定が、どのような審議を経てなされたかは、現在では分からず、推論するよりほかない。美濃国内路線で、旧東山道路線と違うところは各所あるがその内長区間変わっているところが、各務郡以西の各務・鵜沼・赤坂間である。

東山道では、青曇・赤坂（大野郡家）方（長良川）鵜沼へかなり北上して日野辺で長良川を渡っている。それが、中山道では赤坂から呂久へ来て、呂久から美江寺へ少し北上しているもの、以後美江寺・本田・河渡・鏡島・加納・鵜沼と南下路線をとる。この鵜沼・赤坂間には、伊尾川・根尾川・犀川・糸貫川・板屋川・伊自良川・鳥羽川・長良川・境川・荒田川などがあり、渡河する川や渡河地点をどうするかは大きな問題であった。それは、即ち出来るだけ水難を避けたい、渡河の難儀を軽くしたい、といつ配慮をしなければならなかったからである。

河道は変化しているが、東山道筋は、根尾川辺では、海拔一五メートル前後の箇所まで北上して渡り東行している。一方、中山道では、根尾川筋で見れば、五キロほどと南下流の海抜九メートル前後の地点で渡河し、美江寺・河渡・加納へと東行している。伊尾川は、根尾川を合流してから渡り、長良川水系は、板屋

川・伊自良川・鳥羽川や長良三川が合流してから渡っており、渡河数を減らした。この路線の変更で、一五キロメートル以上の鵜沼・赤坂間の道程は短縮されたと見られる。

では、この南下路線の決定には、どのような背景があったか、を推察しよう。

家康は、関ヶ原合戦時、大垣城に籠もる石田三成軍との決戦に向けて、軍勢を率いて西進し、九月三日には、岐阜へ着いた。翌四日早朝、岐阜を出発した家康は、長良川を渡河し、木田・真桑・神戸を経て赤坂へと進み、準備された岡山の陣へ着いた。東山道路線を通じたのである。

関ヶ原決戦で大勝した家康は、大阪で大名の再配置など戦後処理をして、凱旋の帰途をのちの中山道筋の呂久・美江寺・河渡・鏡島・加納のラインをとった。即ち、家康は、関ヶ原決戦を挟んで、旧東山道筋とこの新中山道筋を通過し、両路線を比較できた立場にあった。

この南の路線は、関ヶ原合戦の前哨戦であった八月三日、西軍の岐阜城が、福島・池田らの軍勢によって落城したが、黒田・藤堂・田中らの軍勢は、長良川を挟んで、河渡で対峙する石田・小西・宇喜多・島津らの軍を押し返して西進し、呂久川（伊尾川）を渡河、赤坂岡山へ着き、作陣した。以後、黒田らは、大垣城の三成勢と対峙しつつ、家康の采陣を待つたのであ

る。それ故、この路線は、戦勝ラインであった。家康は、凱旋の帰路をこの戦勝ラインにとり、河渡で休憩し、土地の有力者(名主といふ)宮田(不破)五郎右衛門を呼び出して、その辺りの築城の適地を尋ねた。五郎右衛門は、この辺りは水入りの地で良くない。東一里の加納の地は、かつて斎藤利永の築城地で、その跡を拡張するが良い。この意を具申した。家康は、五郎右衛門に案内させて、加納の地に至り、自ら縄張りして、築城の手配をした。

築城は、家康の腹心本多忠勝が総奉行となり進められた。五郎右衛門は、家康の依頼を受けて、人足・資材調達等の協力をして、功績を挙げた。以後、本町通りに屋敷を構え開設された加納宿の宿老家として、幕末までその地位を保持した。家康は、築城の進んだ加納城主に、娘龜姫の婿與平信昌を任じた。

その加納城主の所領は、厚見・丸鼻・山鼻・本巢・席田・大野の各郡の交通上の要地から美濃路筋の安八郡墨保と中島郡小熊に及んだ。伊尾川以東の美江寺・本田・河渡・鏡島・加納の中山道筋は、いずれもその所領下に入った。

家康の意図は、加納を、東海道の名古屋から美濃の旧中心地岐阜町を結ぶ街道と、中山道とが交差点する交通上・軍事上・産業上の枢要地にして、各務郡以西の美濃平坦地の中心地にして置くことにあったのであり、それ故に、その地の支配を、政権に忠実な親族の與平信昌に委ねたとみられる。

以上のように、各務郡以西の中山道路線の決定には、権力者家康による軍事上の意図と河川水難軽減等への配慮があったと見る。

二 河渡宿の設定

さて、その中山道路線の南下において注目されるのが、河渡宿の設定である。加納宿



関ヶ原合戦御陣場図 部分 岐阜県歴史資料館蔵

鶴沼間は、四里一〇町と長い。西の加納美江寺間は、二里三町と、中山道の平均的宿間である。その両宿の間のそれほど必要でない地点に、河渡宿は、開設されたように見える。ここで、必要と考えられるのは、大河長良川が出水で渡河出来なくなると、川止めとなり、通行者や荷物輸送が、一時滞留を余儀なくされた時の宿泊等の施設がほしきことである。

長良川左岸には、すでに鏡島湊の市街があった、と見られる。それは、鏡島の船荷問屋馬淵と左衛門が、天正一〇年岐阜城主織田秀信から、長良川の登り船荷の荷揚げ独占権を付与されて、岐阜町方面への諸荷物は鏡島で荷揚げされ、それらの倉庫があり、陸送に携わる人夫たちが出入りしていた。その対岸の何もなしに、宿駅河渡が設定されたのである。

長良川は、上流から下流まで集落がよく発達し、人口の集中度が高い河川であるが、上流が伊尾川と並んで多雨地帯で、出水が多く

水害が多発するので、流域民は水害に悩まされてきた。長良川右岸の河渡の渡しは、普段は五〇間(九〇メートル)ほどであるが、出水時には一五〇間(二七〇メートル)となり危険な激流となる。東から西への通行者や輸送荷物は、鏡島で一時滞留となるが、西から東行する通行者・荷物は、河渡に宿駅がなければ、離れた美江寺宿か本田あたりで待機しなければならぬ。その不便さを解消するために、設置された、と見るのが自然である。といつても、大河の兩岸に宿駅がそれに類する施設が設置されているわけではない。この河渡に設置されたのは、家康・與平信昌・宮田五郎右衛門の脈が背景にあったのではなからうか。設置する河渡は、家康の親族與平が領主であり、家康の加納築城の功労者五郎右衛門が住民に影響力を持つ有力者であり、整備がスムーズに進むとみなされて設置が決定されたと、見る。

三 長良川舟路と陸路の結び目

天明二年(一七八二)六月、近江尊宗寺住職で俳僧の林暈は、中山道を馬子を頼み東行し、河渡宿で休憩、渡し舟で鏡島へ渡り、加納宿・岐阜町経由で飛騨へ向けて北上し、古川の寺を宿にして飛騨各地の俳句同好者と交遊し、三か月を過ごした。その帰途、九月三日朝上有知湊(美濃市)から舟で長良川を下り、金華山の麓長良で一旦上陸し、休憩して再び乗船し河渡宿の渡し場で下船、中山道を西へ向かい帰国、道中記「飛騨美屋計」を残している。

「船頭は日髪もあり、十二三歳ばかりの子供もあり、上有知より河渡まで舟の上七里ありといふ。午時に河渡駅に着す。河渡よりは向もなく、早苗とりしが、いこの間にいえる風情も心くるなり、半ば田を刈り…」

右は、その河渡通過の様子を記した箇所である。六月通過した折は、田植えの苗取風景であったのが、いまは稲刈の最中となっていた。といふ。長良川右岸の河渡宿は西も北も南も水田に囲まれた小規模の家並みの宿場街であ

った。とはいえ、とりわけ、河渡は、長良川上流や飛騨地方と京・西国を行き来する人にとって、舟路と陸路交通の結節点になっていた。

四 憩いの街 河渡宿

浮き世絵師深谷英泉の、木曾街道六拾九次の河渡宿の頁には、鶴飼が描かれている。英泉は河渡で宿泊し、夜鶴飼を見物して旅のつれづれを癒すとともに、絵筆を走らしたのである。

河渡宿の町屋は、文久元年一〇三軒で、その総建坪は、一九一〇坪(平均18坪)畳九四九坪・板間一八坪・土間七九坪、二階は畳九三坪、板間二坪であった。これらの建物のうち、旅館屋が四割近くを占めていた。旅館屋には、飯盛女を置く宿屋、飯盛女のいない平旅館屋があった。旅館屋の外には、数軒の茶屋や煮売屋があった。茶屋は、休憩所で、昼の食事の世話をしたが営業時間が、明け六つから暮れ六つという制限があり、日没後は、客を置けなかった。

旅館屋の中には、幕末に向つたがって浪花講とか連友講とか一新講とかの旅行団の定宿になるのが増え、旅客で賑わう日の多い旅館屋も現われてきた。

長良川は、先記のごとく、しばしば出水し川止めをせざるをえなかった。川止めとなると旅行者たちは河渡宿の旅館屋で舟が出るまで幾日も足止めされた。

旅館屋は、旅客たちの旅の疲れや川止めの憂さの良きいやし場であった。飯盛り女の存在は、街の賑わいをも盛り、旅客ばかりでなく近在の村人たちのこころの憂さのいやしどころともなっていた。



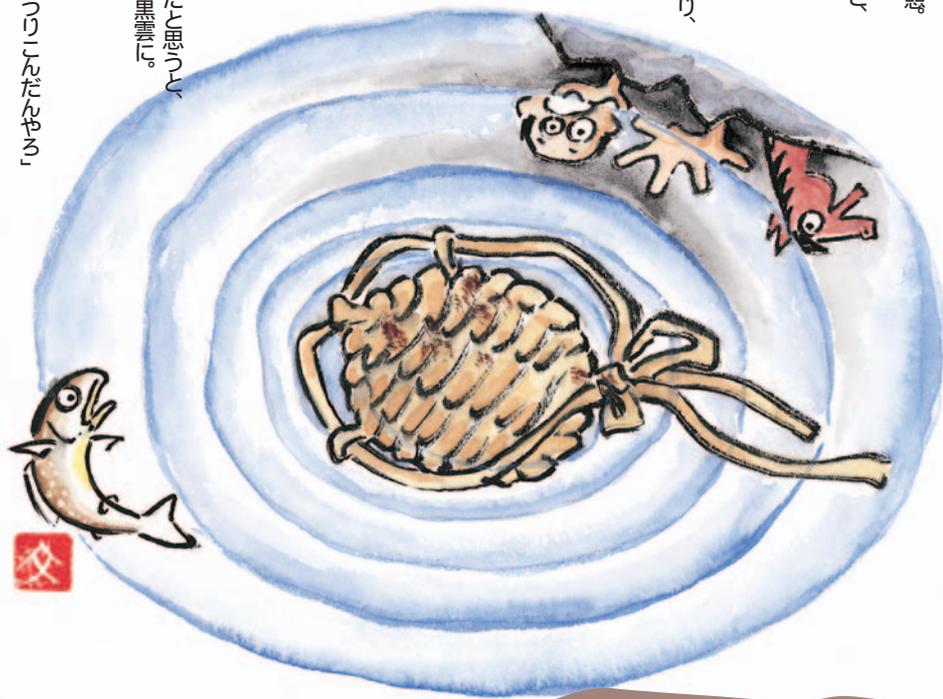
深谷英泉の「岐路路/駅河渡長柄川鶴飼船」天保6年(1835) 類 英泉画

民話の小箱

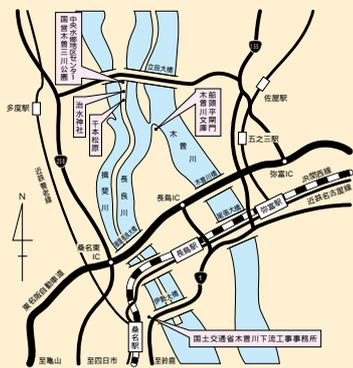
沓部の乙姫さま

益田郡金山町

むかし、むかし。
都からきた美しい乙姫さまが、沓部の村を通りかかりました。
長旅でたいそう疲れていた姫さまは、川原におりてしばし休憩。
「まあ、なんてきれいな川だ。」
乙姫さまは、シャワシャワと歌うように流れる水で手を洗うと、
ここがどよりも気に入って、川辺に住むことを決めました。
この川が馬瀬川です。
川の水は青く澄み渡り、川底の白い石や黒い石、
緑色の大きな石の「つひつが」、
宝石のようにきらきら輝いていました。
それから、乙姫さまは川の首に合わせて歌いながら洗濯したり、
小鳥のさえずりといっしょに、
機織りしたり、楽しそうに毎日を過ごしました。
そんな楽しい歳月もあつとつ間に過ぎて、
都へ帰ることになりました。
別れを惜しんだ乙姫さまは、
「また、ここへ帰りたいから、どっか川を汚さないでね」と頼みました。
村の人々は、乙姫さまが都へ帰ってから、
屋敷や川の岩々をいねいに洗い清め、
このあたりを「おとひめ」と呼ぶようになった。
ある夏の夕暮れのことです。
山すその酒屋の若衆が馬に乗っておとひめへやってきました。
夕日はチカチカと川面を走り、
シャワシャワと水の流れも軽やかに歌っているようでした。
おとひめの一番高い岩に腰をおろした若衆は、
つっかり馬のわらじをぼちゃんど川に落としてしまいました。
すると、今まで静かだった川面は大波となつて岩淵にぶつかりたと思うと、
逆巻く波は爆音をたてて竜巻となり、夕焼け雲は一瞬にして黒雲に。
雲の中を稲妻は走り、酒屋の屋敷には雷が落ち、
白壁土蔵も酒蔵も一夜にして燃え落ちてしまいました。
「あや、若い衆がおとひめの川で何かを洗ったか、汚れ物をほつりこんだんやろ」
「そりゃ、おとひめのためじや。」
「酒屋のだんな、泣くに泣けんじやろ」
と村人はひそかに話し合っていました。
それからいつもの村人はおとひめをいそぐ大事に清め、
子どもたちには、おとひめの大岩にのぼらないよう、いませました。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分
《お問い合わせ》
船頭平開門管理所・木曾川文庫
〒496-0947 愛知県海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

明治改修木曾三川分流完成記念の徳利が木曾川文庫に入りました。贈呈者は名古屋市の早川さん。徳利には、当時内務省土木局長・西村捨三作の漢詩が書かれています。

今号の編集にあたって、岐阜県益田郡金山町の皆様、及び丸山幸太郎氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

次回は、海津郡海津町を特集します。ご期待ください。

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真

左：金山町の溪流 右上：加藤素毛記念館
右中：幻の蝶、ギフチョウ 右下：岩屋岩蔭遺跡